

中高一貫教育校における英語教育のあり方及び教授法

高知県立高知南高等学校 教諭 横山 志保

1. はじめに

Dornyei. Z(2001)は、学習者の動機づけが第二言語習得に及ぼす影響についての議論は尽くされてきたが、その知識をどのようにして実際の授業に応用するのかについてはほとんど論じられていないことを批判した。そして、学習者の動機を高め、維持するためにストラテジー教授の必要性を主張している。

また、約7割の中高校生が「上手な勉強の仕方がわからない」(西島, 2006a; 2006b)と学習上の悩みを挙げていることから、ストラテジー教授を授業に取り入れていくことは、学校教育において必要かつ効果的であると言える。そして、国内における研究も英語学習動機と学習ストラテジーの関連性を明らかにしていることから、ストラテジーを教授することによって、自らストラテジーを使用することができる自律した学習者を育てることが重要である。

2. 研究目的

中高一貫教育校においては高校受験がないため、学習に対する動機が低いと言われるが、彼らを動機づけ、それを維持させていくために、教師は何をすることができるであろうか。これは中高一貫教育校のみならず、現在、様々な要因で困難がもたらされている中高等学校の英語教育に一貫性を持たせるためにも重要な課題である。

本研究においては、「成功した英語学習者(以後 GEL)」と位置づけられる生徒を対象に学習背景、学習ストラテジーに関する調査を行い、教師ができた手だて、できる手だて、どのような取り組みを日常の授業でしてきたかを検証する。そして、学習の基盤となる動機づけも検証に加え、彼らの言動に理論的裏づけをすることにより、中高等学校の英語教育では何が必要であるのか、教師はどのようなアプローチをとることが効果的であるのか、英語の基礎力育成のためにすべきことを提案する。

3. 先行研究

(1) 過去の研究方法

多くの研究者が GEL との相関があるとして、学習者がどのような学習スタイルや言語学習ストラテジーを持っているかについて、様々な方法でデータを収集し、分析、分類して研究を行ってきた。これらの研究から、GEL と学習ストラテジーの使用は関係が深く、GEL 育成にもストラテジー教授は非常に密接な関わりを持っていることは容易に理解できる。しかし、多くは、主に北米における第二言語学習者を対象としたものであり、日本における英語教育とは根本的に違ったものである。日本の英語学習環境下では不可能なことであり、それらを一般化することは難しい。また、これらの研究は、多数の学習者を対象としたもので、学習者が使用しているストラテジーの定義や分類、訓練の方法論に焦点が当たっており、学習者が成功した個々の要因やそのストラテジー使用に至る背景や詳細までは見ていない。それらストラテジーをどのように習得してきたかという、ストラテジー習得過程や学校教育との関わりについても言及されているわけではない。そこで、本研究においては、GEL が語彙、文法、発音を、どのように学習してきたかとともに、どの過程で、どのようなストラテジーを用いてきたか、またそのストラテジーはどのようにして習得してきたものかについても調査することにより、学校教育において、GEL 育成のために教師が関われる部分、やるべきことを明らかにしていく。

(2) 学習ストラテジー

ストラテジーとは、分類や記述について研究者により意見が分かれるが、

“learning strategies are specific actions taken by the learner to make learning easier, faster, more enjoyable, more self – directed, more effective, and more transferable to new situations.” (Oxford, 1990: 8)

“A strategy consisted of mental or behavioral activity related to some specific stage in the overall process of language acquisition or language use.” (Ellis, 1994: 529)

“A learning strategy—serves as a means for the student to increase his knowledge of the language by some manipulation of the language data presented.” (McDonough, 1995:80)

“Learner strategies encompass both second language learning and second language use strategies. Taken together they constitute the steps or actions consciously selected by learners either for the learning of a second language, the use of it, or both.” (Cohen, 1998:5)

と定義されていることから、学習者に力を付けさせるための手段、自律的存在へと変えていくための手段、学習者が学習を容易にするために取るあらゆる手段のことであると言える。使用機会をうまく与えれば約3ヶ月後でも教えられたストラテジーを使用し、ストラテジー獲得とともに英語能力も伸びていくことが確認されている(竹内, 2003)ことから学校教育においてストラテジー教授が重要であることは明らかである。

Carson & Longhini (2002)は成功する学習者とそうでない学習者の違いは言語の学習量ではなくストラテジーであることを指摘している。そこで、ストラテジーが重要だとすれば、私たち教師は、生徒たちに、どのように学習していけばよいのかストラテジーを示していく必要がある。ストラテジーには非常に多くの種類があり、一人が成功したからと言って、他の者も成功するというものではない。斉藤(1996)は、活動に必要な学習ストラテジーをトレーニングし、学習者自身が決定する事項を徐々に増やししながら、学習の目的、方法、素材、評価という学習の全てについて自己管理する学習を繰り返し経験することを通して、自律的学習が現実のものになると指摘している。

(3) 動機づけ要因

英語学習動機は、Oxford(1990)が指摘したように言語習得においてその重要性を排除することは不可能な要因である。また、個人差要因の研究分野の中でも最も多くの研究がなされているものの一つである。また、英語学習動機は、英語の習熟度、学習の達成度との関わりにおいても Gardner(1985, 2004)をはじめ多くの研究者により強い相関関係があることが指摘されている。様々な実験の結果からは統合的動機づけは道具的動機づけよりも学習意欲を長期的に持続させ、道具的動機づけは短期的な学習に有効であると総括できるが、両者は必ずしも相対するものではなく、一人の学習者の中に同時に存在し、状況によって、どちらかが強く出ていると言える。

そして、動機づけの前提となる自己肯定感や自尊感情についての研究は心理学研究分野において活発で、英語学習意欲や動機との相関を見る研究も多い。しかし、これら研究のほとんどは全体としての傾向を見る、量的研究であり、生徒の気持ちや、心の移り変わりなどは数量化しにくいいため、きちんとしたデータを積み上げたものは少なく、もっと個人に焦点を当てた、質的研究が必要である。

GEL への調査を通じて、それらを明らかにしていくことは今後の授業のあり方にとって一つのステップになるであろう。GEL はどのような背景、動機を持ち、どのように語彙、文法、発音学習を行ってきたのか、個人に対する記述及びインタビュー調査を行い、質的側面から検証していくことにより、有効なアプローチを見つけることができると考える。

3 研究内容

(1) 被験者

2006年3月、高等学校卒業時点で英語検定試験2級を取得していた12名。大学などにおいて英語を継続学習しているとは限らない。

(2) 調査方法・内容

① 1回目アンケート調査

2006年11月中旬、被験者のこれまでの学習履歴、学習ストラテジーを大まかに問うアンケート用紙を送付し、記入後、返送するよう協力を依頼した。

② 2回目アンケート及びインタビュー調査

1回目アンケート回答から得られた情報を元に、アンケート調査及びインタビュー調査を実施し、語彙、文法、発音の各学習ストラテジー、動機づけ及び教師の関わりを調査した。アンケート用紙は2007年4月に郵送し、6月末にかけて記入後、返送してもらうよう依頼した。アンケート回答の内、不明瞭な点についてはインタビュー調査を行い、詳細なデータを蓄積した。データは、以下4つの観点、うちア、イ、ウについては、学習初期（小学校、又は中学校1年次）初期後半（中学校2、3年次）、中期前半（高等学校1年次）、英語学習中期後半（高等学校2、3年次）、現在の5つの時系列に分類した。

ア 使用ストラテジー

語彙、文法、発音学習においてあるストラテジーをどの段階において、どの程度の頻度で、どのくらいの期間使用したのかを問う。

イ 効果的ストラテジー

1回目アンケートの回答では、最も充実していた授業形態として、多くの被験者が、ディベート活動を挙げていた。そこに至るために役立った活動、学習ストラテジー、適切な教材、それらを行うための適切な時期、特にわずかな語彙しか保有しない中学校時においては何が必要であったかをふり返ってもらう。

ウ 動機づけ要因

単調で長期にわたる英語学習に対する意欲を支えた根拠、英語を学習しようと思った動機を問う。どのような動機で英語学習を始めたのか、また継続してきたのかを問う。

エ 被験者からの提案

被験者自らが力をつけるに至った背景をふり返りつつ、授業形態や自らの反省もふまえて、中高等学校における英語の授業への提案をしてもらうことにより、生徒の視点から見た力のついた教授法や教師の姿を考察する。

(3) 結果・考察

①ストラテジー

被験者の記述から、初期、中期段階ともに英語の基礎力定着に重点を置いた学習がなされ、後の運用能力につながるためのストラテジーが意識的に使用されていることがわかる。多くの被験者にとって、語彙の習得は繰り返し練習の連続であった。特に英語学習初期においては新出単語についての記述が多く、繰り返す、覚えるまでやる、何度もやる、暗記するまでやったとの記述が多い。その他の語彙習得ストラテジーとして、被験者は、文脈からの推測、単語カードの利用、接尾辞など語の分析的知識の活用、辞書使用を挙げている。被験者の半数は、未知の単語に出会った時にはまず、前後関係から推測してから辞書を活用している。これは、即座に語句だけを対応させようとするのではなく、基底能力である日本語能力を用いているということになる。これらの記述は、中期前半まで多く見られるが、同時にこの時期からは文法項目にも焦点が当たってきている。多くの被験者が文法項目を参考書や補助教材使用により、繰り返し学習している。教師の作成したワークシートを用いる、強制を伴った繰り返し練習への記述や教師が課した宿題や試験が効果的ストラテジーとして記述され、様々な形での教師の関与が見られる。日本のように多くの場合学校でしか英語を学習しない環境においては、文法学習のような積み重ねが大切である学習は、最も日本人にあった有効な学習方法であり、後にアウトプットを引き起こすための重要な下位項目であると言える。アンケート記述から、彼らにとって、適切な時期に、しっかりと語彙・文法指導を受け、意識的に様々なストラテジーを用いて学習してきたことは、英語力上達にとって非常に効果的であったと言える。

被験者の多くが、第1回目、2回目のアンケート回答ともに、ディベート活動が最も充実した授業形態であったと挙げているが、この活動は、これら被験者が初期、中期前半において徹底した繰り返しによる基本語彙、文法項目の学習を行い、基礎的な力がついていたからこそできた活動であると言える。英語を話す、使う活動として人気の高い活動にスピーチやプレゼンテーション、ディスカッション、ディベートなどコミュニケーション活動が取りざたされているが、これらの活動の前には必ずといっていいほど、生徒たちは原稿を書いている。この段階で、語順がばらばらで意味を成さない文章が非常に多く見られる。

そのため、教師は、文法項目や語彙の復習をやり直さざるを得ないのである。今回の被験者が効果的な授業として挙げたディベート活動の場合、相手が同じレベルの英語力を持つ生徒であるということを考えると、相手が理解出来る発音や語彙、文法といった基本的なスキルがまずは要求される。現在のオーラルコミュニケーション重視の風潮に合っても、どこかの時期における徹底した語彙、文法指導は必要である。目前の英文の構造が理解できることは非常に重要なことであり、教師はそれを理解できるように教えなければならない。徹底した語順指導、学習がなされていないならば生徒たちは原稿さえ書けないのである。今回の被験者たちは、学習初期における徹底した、単語の繰り返しによる暗記、中期における文構造の理解のための繰り返し確認を意識的に、又は教師の強制によって行っている。まだ、十分な語彙を持たないこの時期だからこそ、できる活動であり、しなければならない活動である。初期から、中期、後期の学習へとつなげて行くためには初期、中期における語彙、文法の土台づくりが非常に重要であり、本来、教師が中高等学校、特に中学校教育で教えるべきことは、最も基本的なことであるということが今回の調査により容易に理解できる。

この語彙、文法に加えて、学習初期から発音や音声への注目も多く見られる。発音の記述に関しては、使用ストラテジーにはあまりなかったが、効果的ストラテジーとして記述が多い。これは、実際は、被験者があまり発音に注目した授業を受けずにきたが、後に発音で苦勞したことから、この時期の徹底した発音指導が必要だったということを表している。発音についての記述はその後、あまり見られなくなるが、被験者たちはそろって、英語学習初期段階における繰り返しによる語彙習得やきちんとした文法説明によるインプットの必要性とともにきちんとした発音指導の必要性を指摘している。

多くの被験者は、最も学習効果の上がる方法は何かという問いに中期からのアウトプットの必要性を主張している。被験者たちは学校教育において、学習中期前半まで、文法訳読式中心の授業を受けており、彼らがアウトプットの必要性を感じ、行動しようとするのは、それまでのインプットがあるからである。彼らは、アウトプットのためのリソースなしに使用機会を増やそうとしているのではなく、初期においてインプットし、インテイクした後に、実践の場としての使用機会を求めていることがわかる。また、長い間、批判されている文法訳読式ではあるが、今回の被験者たちはこの教授法を否定していない。

学習効果を上げるためには目標設定をさせることは重要であるが、いきなり高いゴールを設定しても行き着くことはできない。被験者 K, L が「努力が結果となって見えると次へのステップになった」と指摘していることから、教師は、目標に向かって、階段を一步一步上がるようなゴール設定をするなどのメタ認知ストラテジーを教授する必要がある。中でも文法理解や語彙習得は、生徒にとって、自分の成長が自分自身で測れるものであり、自らゴール設定しやすい分野であろう。語彙学習ストラテジーは数も多く、生徒たちは自分に合ったストラテジーで語彙習得をすることができる。文法学習についても、B, C のように音を聞いて丸ごと覚えるストラテジーや、H のように声に出して覚える、自分自身でその語彙や文法を用いた文章を書くというストラテジーがある。これらストラテジーは使用方法の提示も簡単であり、使用することによってどのような効果をもたらすことができるのか結果も示しやすい。様々なタイプの個人差に対応できるものがストラテジーである。被験者の回答から、彼らの教師たちが様々なストラテジーを提示し、彼らはその中から自分に合ったものを使用していることが分かる。特に、中期において、多くのストラテジー使用の詳しい記述が見られる。これにより、被験者たちは多様な言語適正や学習スタイルにあった学習ストラテジーをもち、個性を発揮し、英語学習を進めたと言える。

GEL は多岐にわたるストラテジーを使用し、後期においては、中期までに学んだストラテジーを継続して使用、若しくは発展させて使用していることから、教師はできるだけ多くのストラテジーを提示し、教授していくことが必要であることがわかる。そして、習熟度が高い学習者と低い学習者では学習ストラテジーの使い方に違いがあり、後者はストラテジーを使うことが少なく、他のストラテジーを使っていない可能性がある。また、使っていても、使用方法や、場面が合っていない場合もある。そのため、GEL が使用しているストラテジーを紹介するとともに、個人に合った適切な使用方法、使用場面を紹介する必要がある。そして、被験者たちは、その時期に、なぜその学習ストラテジーを用いるのか、それをすることにより、どのようなことができるようになるのかを教師が生徒に明示する必要性も挙げている。

②動機づけ要因

被験者は、学習初期の動機づけとして、先生が好きだった、テストの成績、英語が話せることへの憧れ、英語話者とのコミュニケーションを挙げており、動機づけは比較的ストレートで単純なものである。中期からは、記述は少し複雑になり、教師や周りの環境、教材との関わりなど外的要因への記述が多く加わっている。検定試験やテストの点数がきっかけだったが、後に、将来の仕事に役立てるためという道具的な位置づけ、達成感や教科書の話題性、教師の影響やコミュニケーションの手段として、また、自分が英語を話している姿を想像する(C)ことや目に見える結果が動機づけ要因となり(J,K)、学習効果が上がったようである。中期に見られる記述には、教室環境や周りの状況、教師の指導、学習ストラテジーの提示の仕方、教授方法が動機づけに大きく関わっていることがわかる。心理学の分野でも教師のパーソナリティが大きな要因となり、教授法の効果を測る上では非常に重要な要因であるとの指摘がある(倉八他, 1992)。実際は、教師のパーソナリティの差異を揃えることは難しいが、被験者の回答から、教材の選択や提示方法の選択、ストラテジー教授により生徒の動機を向上させることはできる。教師は、学習ストラテジーを到達目標が見える形で、提示し、教授していくことが必要であり、また、その取り組み方を細かいステップを提示しつつ教えていくことにより、生徒の動機を上げていくことはできる。その結果、英語を学習しようとする環境になり(H)、学習しているという実感を持ち(K)、上を目指そうとする気持ちになってくる(A,H)。これら被験者は、英語学習そのものが単なるゴールではなく、何らかの目標に向かっての手段や必要性といった道具的要因、若しくは統合的な要因に動機づけられているものの、それを維持するためには、教師によるストラテジー教授が重要な役割を果たしたと言える。英語が得意な生徒とそうでない生徒を分けているのは言語適正や知性ではなく、動機づけと学習ストラテジーの使い方にあり、その2つには大きな相関があり、教師はこれに関与することができる。そして、学習動機と学習ストラテジーの関連性が大きいことから、両者をうまくつないでいくことは学校教育において効果的な教授法となると考える。教師は、生徒の動機づけを考える時、何をどうすれば英語力を育てることができのかを生徒に常に明示していくとともにストラテジー教授により生徒の動機を向上させ、維持させる必要がある。

③被験者からの提案

教師はその場、その場で生徒ができるかできないかに目を奪われがちであるが、先を見越して考えた時、つまり、高等学校卒業時に、何ができるようにさせたいかを考えた時、英語学習初期で英語を話せるようになることは重要ではない。むしろ、多くの被験者が指摘するように徹底した語彙習得、文法構造の理解により基礎を積み重ねた上に、様々なコミュニケーション活動を重ねていく方法が妥当ではないだろうか。

教師がどうしたいかではなく、生徒にとって、どの割合が最も適しているのかを考える必要がある。特に基礎基本を重視すべき中学校においては、それらを身につけるためには日本語使用により、しっかりとインプットしてこそ、高等学校における英語での授業につながっていくものであると考える。そして、このインプットの仕方としては、H,Lは徐々に難易度を上げていくものが良いと回答している。これは、理解可能なインプットが不可欠であり、まだ身につけていない語彙、文法などの言語表現が少し含まれているようなインプットが言語習得を促進する、というKrashen(1985, 1989)の指摘と一致する。同様に、教師側が要求することも徐々にレベルを上げていくことが重要である。また、教師は生徒が達成感を感じる課題を与えることが重要である。それにより生徒は次に進もうとする意欲が出てくる(H)。そして、明確な目標を持たせ、細かいステップを提示することも必要である。教師は常に生徒一人一人のレベルに合った教育を与える必要がある(L)。つまり、常時個々の生徒の進捗状況を把握するとともに、その状況に合ったアドバイスをしていかなければならない。そして、E,G,Hは、教師が生徒にとって目標とするモデルであることの必要性を指摘している。

* 文章内のアルファベットはアンケートに回答した被験者の整理記号を表す。

③まとめ

日常生活する日本語は生きるための道具であるが、英語はそうではない。教室で学んだ英語を生活言語や必要言語にまで高めていくことは、最終的には一人一人の問題である。そのため他の教科に比べても動機が低くなることは否めない。そして、短期間で身に付くものではないため、生徒が継続して自律的に学

習に取り組むことが求められる。

今回の被験者のように自分一人でも学習を続けていくストラテジーを持たなければ、学習の持続は困難であろう。学校教育における週3、4時間の学習だけで英語が流ちょうに話せるようになることはあり得ない。しかし、彼らが高等学校で学んだストラテジーを教師の手を離れた後も使用し、自身で学習を継続していることから、英語を学ぶ方法を教えることは週に3、4時間の授業でも可能であると言える。また、彼らは学習の過程において、自らの動機を高め、自ら学習ストラテジーを用いることができる自律した学習者になっている。Oxford(1990)が学習ストラテジーと学習者の自律の相関について述べたように、日本の英語学習環境におけるGELも自律性が高い。このことから中高等学校英語教育において必要かつ重要なことは、自律した学習者育成を目指した、語彙、文法、発音指導を重視した基礎力養成であると言える。

しかし、実際の学校教育における英語は、どれだけこの基礎力養成を意識して行われているのだろうか。コミュニケーションという言葉に大きく傾き、現状では、ディベートやスピーチの下位項目となる肝心の語彙、文法、発音などの基礎が軽視されているのではないだろうか。指導要領によると、外国語科の目標は「実践的コミュニケーション能力を養う」ことに主眼が置かれている。教室内では、コミュニケーション活動重視の言語活動が推奨され、その基盤である語彙、文法知識、個々の発音の習得などの基礎力や学習者に求められる自律に目が向けられていない感がある。教室内で行われる活動は、実際の生活の場で、使用できる事柄は非常に少ない。将来、英語でコミュニケーションをとれるようになるためには、中高等学校では何をすればよいのであろうか。英語でディベートができるように6年間で育成できればそれに越したことはない。しかし、中高等学校教育で教員がすべきことは、将来、自分自身で学んでいこうとする自律性を育成していくために、学習ストラテジーを教授し、ある程度まとまりのある語彙、文法、発音の基礎力を身につけさせることではないだろうか。

4. 英語の基礎力養成のために

自分で学習しようとする自律性や、基礎力育成を学校教育として教員がすべきことであるという視点に立ち、被験者たちからもたびたび指摘された、以下3点について英語教育における重要性を確認する。

(1) 語彙

多くの語彙を習得することは実践的コミュニケーションにとって必要不可欠なことである。そのためには、様々な語彙学習活動を準備して学習者を退屈させないようにすることが重要である。同時にストラテジーの指導を通して学習者を動機づけていかなければならない。様々な語彙学習ストラテジーが提案され、分析されているが語彙学習を促進するためには教師が多くの場面で関わり、特に中学校においては音と文字を結びつけてしっかりと教授する必要がある。

(2) 文法

歴史的、言語的、社会的に距離がある英語を習得するには長い時間を必要とする。そして、文構造を理解する文法学習は得た知識を体系的に整理し、英語の習得を容易にすることができる、発話や書くことの元になる文章の構成を自分でできるなど、生の英語に接する時間が限られた日本の英語教育環境の中では、しっかりと文法指導・学習は自律学習にとって、有効な手段であり、将来必要性が生じ、再スタートする際にも不可欠なものである。

(3) 発音

発音指導は、早ければ早い程良いというのは通説となっており、当然、中学生から発音をしっかりと指導しなければならない。英語を聞くだけで流ちょうな発音になるわけではなく、教師が意識的に導いていくことが必要である。教師は、発音矯正は学校でする、という意識を持ち、発音を重視し、繰り返し練習させることを徹底しなければならない。

5 結論

自律した学習者になるためには、回りの状況にかかわらず、自力で効果的な学習ストラテジーを選択し、自らの学習に積極的に関与しなければならない。その手助けをするのは教師の役割であり、できるだけ早

い時期に自律学習ができるように導いていくことが重要である。そして、この自律した学習者の育成を目指しての授業作りこそが、日本の英語学習環境下で、他の制約を受けることなく、学校教育において行うことができる最も重要なことではないだろうか。そのための方法として、授業において、目標を確認し、その目標がどの程度学べたのか、学べなかったのかを確認させることが必要である。また、目標以外でも、何か新しいことを学べたのか、自分の進捗状況を生徒自身に確認させ、教師は適切な指導をし、生徒の反応に反応を返さなければならない。そして、適切な時期に効果的なアドバイスをすることにより、将来の自律学習の基礎を作っていくことが可能になると考える。語学の学習は長い時間を要するもので、英語の上達を目指すならば、日々の地道な努力や訓練が欠かせないことはこれまでの成功した学習者の多くが共通して述べていることである。単語や文法項目の機械的な練習や繰り返しは当然のことである。十分に動機づけられた学習者はそれらをこなし、GEL になるであろう。しかし、動機が低い学習者に対しても、ある課題に向かっていく時に何をしたらいいのかわからないのではなく、何をどうすればいいのかを考えさせ、実行させることにより、ゴールに行き着く喜びを理解させることも必要である。自分が努力し、何かに到達していくという過程を習得させなければいけない。どのようにして課題を解決していけばいいのか、どうすれば自分の力で到達できるのかを習得させ、自分なりのストラテジーを発見し、進んでいく方法を学ばせるのである。これはまた、現在日本の教育で推奨されている「生きる力」にも通じるものである。教師は、目の前の生徒たちの1年後、2年後、特に中高一貫教育校においては6年後を見つめ、今、目の前にいる生徒を育てるという意識を持つことができるし、持つ必要がある。それは、生徒が自分自身で、将来学習したいと感じた時にスタートできる基礎を作っておくことでもあり、中学校や高等学校における英語教育では、目先の教授法にとらわれることなく、その基礎作りこそ必要なのではないかと考える。GEL に対する調査を通して、この基礎作りに必要なものは何であるかが見えてきたと考える。

6 参考文献

- Carson, G. J. & Longhini, A. (2002). Focusing on Learning Styles and Strategies: A Diary Study in an Immersion Setting. *Language Learning*, 52: 2, 401-438
- Cohen, A. D. (1998). *Strategies in Learning and Using a Second Language*. London : Longman
- Dornyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University
- Ellis, R. (1994). *The study of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Gardner, R. C. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation*. London: Edward Arnold
- Gardner, R. C., Masgoret, A. M, Tennant, J. & Mihic, L. (2004) Integrative Motivation: Changes During a Year-Long Intermediate-Level Language. *Language Learning*, 54:1, 1-34
- Krashen, S. (1985). *The Input Hypothesis: Issues and implications*. New York: Longman
- Krashen, S. (1989). We Acquire Vocabulary and Spelling by Reading: Additional Evidence for the Input Hypothesis. *The Modern Language Journal*, 73
- Oxford, R. L. (1990). *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*. Rowley, New York: Newbury House
- McDonough, S. H. (1995). *Strategies and skill in learning a foreign language*. London: Edward Arnold.
- 倉八他(1992)「コミュニケーションアプローチと学習意欲」『教育心理学研究』第40号, 304-314
- 文部省(1999a). 『中学校学習指導要領(平成11年10月)解説一外国語編一』
- 文部科学省(1999b). 『高等学校学習指導要領(平成11年12月)解説一外国語編一』
- 西島央(2006a). 「学習上の悩み」『第4回学習基本調査報告書』(高校生版) 31-34 Benesse 教育開発センター
- 西島央(2006b). 「学習上の悩み」『第4回学習基本調査報告書』(中学生版) 32-36 Benesse 教育開発センター
- 齋藤ひろみ(1996)「日本語学習者と教師のピリーフスー自律的学習に関わるピリーフスの調査を通して」『言語文化と日本語教育』15, 58-69, お茶の水女子大学日本語文化研究会
- 竹内理(2003)『より良い外国語学習法を求めて』東京:松柏社